

テーマの紹介
ストレンナ 2023 概要

STRENNA 2023

ドン・ボスコの家族として 社会のよきパン種となろう

COME LIEVITO NELLA FAMIGLIA UMANA D'OGGI.

La dimensione laicale della Famiglia di Don Bosco

COMO FERMENTO EN LA FAMILIA HUMANA de Hoy.

La dimensión laical de la Familia de Don Bosco

AS THE YEAST IN TODAY'S HUMAN FAMILY.

The lay dimension in the family of Don Bosco

COMME LEVAIN DANS LA FAMILLE HUMAINE AUJOURD'HUI.

La dimension laïque de la famille di Don Bosco

COMO FERMENTO NA FAMILIA HUMANA HOJE.

A dimensão laical da família de Dom Bosco

まず初めに、2023 年のストレンナは、二つのグループを対象としていることを、皆さんに思い起こしてもらいたいと思います：世界中、ドン・ボスコの家族がいるところどこでも共にいる、幼い子どもや思春期の子どもたち、青年。そして、自らの**信徒的次元**を発見、再発見するよう招かれている、サレジオ家族のすべてのグループです。

なぜ二つのグループを対象としているのでしょうか？ 答えは簡単です。私たちは、イエスの言うパン種のようになれるのだと、一人ひとりが発見できるよう、小さな子どもたち、何よりも思春期の子どもや年上の青年たちを、私たちの教育法と霊性を最も特徴的づけるものに照らし、助けようとしているからです。「人類家族のパン」が成長し、より香り高いものとなるのを助ける、良いパン種になれるようにと。イエスの傍らで、あるいはそれぞれの信じる宗教の善良な信徒として、子ども、若者、一人ひとり、まことの積極的な働き手となり、本物の使命を担うことができるのです。

ドン・ボスコの家族のため、ストレンナは、明快な、思索を促すメッセージであろうとするものです。私たち皆が関わるこの家族、大多数が信徒・ライチで、あらゆる国の女性、男性たちであり、信徒・ライチ、キリスト者としての生き方によって、人類の中でまことのパン種となるよう呼びかけられている、その家族の信徒的次元を私たちが発見するためです。それを切実に必要とする人類の中にあって。

サレジオ家族の中の奉献生活者である私たちも、同じように「人類というパン生地の中のパン種」となるよう、そして兄弟姉妹の福音的な在俗の次元に寄り添い、豊かにされるよう、招かれています。端的に言えば、私たちは家族として、互いに補完し合うよう呼ばれているのです。

また言われた。
「神の国を何にたとえようか。
パン種に似ている。
女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、
やがて全体が膨れる。」 (ルカ 13・20-21)

パン種は静かに働きます。

発酵は沈黙のうちに進みます、内側から働く神の国のみわざも同じです。

パン種が混ぜ込まれた小麦粉と生地の中で、すべてを発酵させながら働きかけるその音を聴いたことのある人などいるでしょうか？ 神の国がどのように働くか、このたとえは理解させてくれるのです。使徒パウロは、その奥深い秘義から神の国を示し、次のように言っています：「神の国は、飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです。」 (ローマ 14・17) そのすべてが聖霊の内なる、目に見えない働きです；心に置かれたパン種です。そしてパン種が接触を通して働くように、福音も出会いを通して働きます。

ストレンナ 2023 のテーマとして選ばれたパン種のたとえ話は、大いなる福音的知恵を表す、教育論的に、また教育において、意味深いたとえ話で、イエスが生き、教えられた神の国の特質を表現しています。

この箇所は、いくつかの神学的解釈があります。こんどのストレンナのために選んだ解釈は、まさに、神の国の実り豊かさと成長のイメージとしてパン種を示すものです。それは、いのちへの召し出しという賜物、神が私たちが植えられた場における召命という賜物の豊かさを、人々の心の中で豊かに実らせ、この世における信徒の使命、ドン・ボスコの全家族の使命を方向づけます。

「わずかなパン種が練り粉全体を膨らませるのです。」 (ガラテヤ 5・9) わずかなパン種を加えると少ない量の小麦粉が 2 倍、3 倍になるのには驚かされます…… **神の国は**、パンを作るときに小麦粉 (パン生地) を発酵させる **パン種** のようだと、主は言われます。パン種には何か特別なところがあります。練り粉に「前向きな」影響を与える力です。

主が福音書のたとえ話で強調されるように、パンを作るときに使う材料の中で、パン種は量として最も多いものではありません。その逆です。とても少ない量が用いられますが、ほかと違うのは、パン種が **唯一の生きている材料** だということです。そして生きているからこそ、生地全体に **影響を及ぼし、ととのえ、変容させる** 力をもつのです。

そうであるならば、神の国はこのようなものであると言えるでしょう：「人間的視点からは、小さく、取るに足らないように見える現実です。み国にあずかるためには、人は心の貧しい人にならなければなりません。自分の能力ではなく、神の愛の力を信頼しなければなりません。世間的な注目を浴びるためではなく、質素で謙虚であることを望んでおられる神の目から見て尊い者となるために行動すべきです。……[確かに]み国はわたしたちの協力を必要としています。しかし、それは何よりも、主が率先されるみわざであり、主のたまものです。この世の複雑な問題の前では、わたしたちのわざはか弱く、小さなものに見えます。しかし、神のわざにあずかるなら、どんな困難も怖くありません。主の勝利は確実です。主の愛は、地に蒔かれたあらゆる善の種を芽吹かせ、成長させます。だからこそ、わたしたちは悲劇や不正義や苦しみに直面しても、信頼と希望に心を開くことができるのです。善と平和の種は芽吹き、成長します、神のいつくしみ深い愛が種を成長させるからです。」 (教皇フランシスコ, 2015 年 6 月 14 日, 「お告げの祈り」での言葉)

1. 私たちの世界、この世で発酵する神の国、光と影の間で

ファリサイ派の人々は出て行き、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。

イエスはそれを知って、そこを立ち去られた。大勢の群衆が従った。イエスは皆の病気をいやして、御自分のことを言いふらさないようにと戒められた。それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった：

「見よ、わたしの選んだ僕。わたしの心に適った愛する者。

この僕にわたしの霊を授ける。

彼は異邦人に正義を知らせる。

彼は争わず、叫ばず、

その声を聞く者は大通りにはいない。

正義を勝利に導くまで、

彼は傷ついた葦を折らず、

くすぶる灯心を消さない。

異邦人は彼の名に望みをかける。」（マタイ 12・14-21）

- ここで、ごく普通の人々、いやしを必要とする病気の人々の間でパン種として働かれるのは、イエスご自身です。「イエスは皆の病気をいやし」……これは「人々laos」の間でのイエスの「信徒的な lay」顔です。そこでは社会階層や出自による分け隔てはありません。人々は皆、貧しく助けを必要としていることにおいて一致しているように見えます。
- イエスの生涯について伝えられている、歴史的に最も信頼性の高い要素は、イエスの宣教全体
- に行き渡るシンボル、イエスのあらゆる活動に意味を与えたもの、すなわち、「神の国」です。共観福音書はイエスの教えと宣教を、次の簡潔な一文に要約します：「悔い改めよ、天の国は近づいた」（マタイ 4・17）。この言葉は福音書に 122 回登場し、90 回はイエスの言葉として記されています。したがって、イエスのご自身ではなく、神の国を宣べ伝えたということは明白です（カール・ラーナー）。
- しかし、神の国という言葉、神の国を宣べ伝えることは、イエスの宣教の中心テーマ、ほとんどのたとえ話の焦点、イエスの語られた多くの言葉の主題であるにとどまりません；神の国は、イエスの象徴的な行動の内容でもあるのです。それはイエスの奉仕職の大きな部分を成すものです。すなわち、徴税人や罪びとの友となり、彼らと食卓を囲むほど交わったこと、病気をいやし、悪霊を追い出されたこと……。イエスは、社会の辺縁に追いやられた人々との交わり、最も貧しく、さげすまれ、疎外された人々への共感のうちに、神の国を満ち満ちて生き、最も小さな人々への神の無条件の愛を、行動をもって示されたのです。
- 今日、私たちはこの世界に、建設中のこの神の国に、実に多くの善いものがあると認めます。そして同時に、実に多くの悲しみ、痛みがあることも、私たちは認めます。人類家族として、私たちのあり方、行動のしかたによって生み出される悲しみ、痛みです。そのような私たちは、全く特別なやり方でみ国を打ち立てる「神のなさり方」に、目と心を開かなければなりません。私たちはそのやり方で — 主のなさり方で — 主に協力しなければならないのです。ほかの選択肢はありません。神の国が神のものでなくなり、「私たちの国」となってしまうことを望むのでないかぎり。
- その意味で、福音書がイザヤの言葉を通して伝える、イエスにおいて現れた神の国は、私たちにとって意味深いものです：「彼は争わず、叫ばず、その声を聞く者は大通りにはいない。正義を勝利に導くまで、彼は傷ついた葦を折らず、くすぶる灯心を消さない。異邦人は彼の名に

望みをかける。」（イザヤ 42・2-4）そして望みをかけるのは、イスラエルだけでなく、あらゆる国となるでしょう……**散らされていた神の子らが一つに集められると**。私たちサレジオ家族を特徴づける普遍性へと開かれた心は、神の国の福音ととてもよく調和します。教会は優に99%以上、信徒で構成されています……全世界を視野に包み込むなら、信徒・ライチの割合がどれほど大きくなるか想像できるでしょう：信徒・ライチは、神の国のパン種であるとともに、生地でもあるのです。

- 時に、私たちの人間としての貢献や小さな働きは取るに足りないもののように見えるかもしれませんが、神の前ではいつも大切なものです。私たちは、自分たちの働きの効果や成果を、投資の大きさや求められる努力に価値を置くことによって量るべきではなく、量ることもできません。なぜなら、あらゆることの究極的な意味は神にあるからです；同時に、与えられた使命を果たすこと、神の国の建設は不可能であると、劣等感や偽りの正当化に陥ってもいけません。それは私たちを妨げ、麻痺させるのです。
- 「われらが神のまなざしとみ心」の前で、小ささと謙遜は、弱さと混同されてはなりません。求められている「多く」を前にして、私たちは少しのことしかできません。しかし、それは決して「足りない」、あるいは取るに足りないことではありません。なぜなら、成長をもたらし、増やされるのは神だからです。神はその力をもって助けに来てくださるのです。そして、私たちの働き、献身、私たちが生地の中の貧しいパン種であることに、最終的に共に歩んでくださるのは、神なのです。私たちがいつも、あらゆることを、神の名によって行うならば。

2. を必要とする人類家族

すべての人が — この世で — 自分の存在の意味を見いだすよう呼ばれています。それはまさに、人類家族の中で、健全な、兄弟愛のある生き方をすることです。パン種のたとえ話と今回のストレンナは、大きな挑戦に満ちたこの世界に、時間のダイナミズムと人類の歴史を通して入って行くよう私たちを導きます。生地に加えられたパン種は、発酵するのに必要な時間があります。

この神の時、カイロス *kairos* は、教皇フランシスコの言う、時間が空間よりも重要であるダイナミズム¹の中に入ることを教えてくれます。特に、バーチャルな、デジタル化されたコミュニケーションが、ネットワークの環境を、それぞれが瞬時にインタラクティブにやりとりする環境を創り出す世界で。私たちの生活・人生における時間の意味、コミュニケーションのあり方、働き方、人間として共にある生き方における時間の意味を深めることはとても大切です。

人類家族を築き上げることは、私たち皆の責任であり、皆が取り組まなければならないことです。私たちは、周りに多くの善があることを知っていますが、自分たちの暮らすこの世界に、いまだ克服されない多くの苦しみがあることも知っています。教皇フランシスコは、まさにこのことを、次のように思い起こさせます。「どの時代でも、過去の世代の努力と成果を自分のものとし、それをさらなる高みへ到達させる必要があるということです。それが歩む道です。善は、愛、正義、連帯と同じく、一挙に達成されるものではありません。日々勝ち取るべきものです。過去に獲得した手のうちにあるものでよしとしてはいけませんし、わたしたち皆に問いただしている、多くの兄弟姉妹が今なお苦しんでいる不公正な境遇を否定するかのようにして、それに甘んじてはいけないのです。」²

¹ 「希望を奪われてはなりません。短絡的な解決や提案によって希望を台なしにしてはなりません。これらの提案は、わたしたちの歩みを妨げるばかりか、時間を『断片化』して、空間に変えてしまうからです。時間はつねに空間にまします。空間がプロセスを止めてしまうのに対して、時間は未来へと導き、希望をもって歩むよう促すのです。」（教皇フランシスコ、回勅『信仰の光 *Lumen Fidei*』 57）。

² 回勅『兄弟の皆さん *Fratelli Tutti*』 11.

そのため私たちは、**人類家族**が実に多くの必要をかかえた家族であると気づくのです：

- a. 最も小さな人々、疎外された人々のための正義と尊厳を必要とする（回勅『兄弟の皆さん』(FT), 15-17; 18-21; 29-31; 69-71; 80-83; 124-127; 234) ；
- b. 真理を必要とする（回勅『信仰の光』 LF 23-25; FT 226-227） ；
- c. 平和と兄弟愛を必要とする（FT 88-111; FT 216-221; 使徒的勧告『キリストは生きている』 ChV 163-167） ；
- d. 神を必要とする（LF 50-51; LF 1-7; LF 35; LF 58-60） ；
- e. 共に暮らす家である地球環境を大切にすることを必要とする（回勅『ラウドト・シ』参照） ；
- f.を必要とする。

私たちは、今日行うべき善を明日に先延ばしてはならないのです！ 私たちはドン・ボスコの家族として、この人類家族のパン種となるよう呼ばれています。このビジョン — パン種の福音的ダイナミズム — に導かれ、私たちは、世界各地のすべての事業所の信徒・ライチ、ドン・ボスコの家族の中の信徒・ライチの、霊的な、信仰における召命、キリスト者としての召命の豊かさを深め、認識したいと思えます。さまざまな文化、社会における、それぞれのいのちのたまもの、信仰の力、家庭の美しさ、生活と仕事の体験を大切に、そこに価値を見いだしながら。

3. 信徒：「この世界を内側から聖化する」キリスト者

聖性をもつばら修道生活に結びつけ、信徒の生活、社会における生活にほとんど縁のないもののように考える習慣は、私たちに深刻な損害をもたらしてきました。この分離は、歴史を通じて好ましくない結果をもたらしてきました。

1. 神が父であるという事実から、私たちは皆、兄弟姉妹です。この普遍的な兄弟の絆から、連帯、愛徳、交わりへの呼びかけが生まれます。
2. 御子の受肉により、この世のどのような事柄も「神の神秘」を明かしてくれることが、明白に示されました。
3. 人間を「聖霊の神殿」ととらえることにより、聖なるものとの出会いの場として、人間自身が最もふさわしいということが導き出されます。聖書は述べています。「知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。」（1コリント 6・19）³

「神学的には、教会全体の在俗性は、教会と世界の関係の意味から、またキリスト者の祭司職、預言職、王職の次元から理解される；洗礼を受けたすべての人は、神の救いのみ旨とみ国が現れるためこの世に仕えなければならない教会の一員である。その洗礼を受けた一人ひとは、それぞれの固有な仕方でのこの在俗性を実践したり、発展させたりし、それによって、奉仕職や役割の多様性、またある程度まで、世界、歴史、社会における『存在と状況』の多様性が生まれる。」⁴ また、多くの場合、家庭における固有の召命、あるいは社会における職業的・専門的役割を通して生きられる在俗の生活そのものから、ライチ、特にキリスト者のライチ、ドン・ボスコの家族のライチは、社会と歴史において福音の価値を据え、促進し、守るよう、そうして、‘*consacratio mundi*’ 世の奉献に、神の国がここに、今、打ち立てられることに貢献するよう、呼ばれているのです。

³ CLARETIANOS, Ciudad Redonda, “*Vivir para Dios: dimensión política de la Espiritualidad Laical*” pdf

⁴ BERZOSA, R., “¿Una teología y espiritualidad laical?” Revista Misión Abierta, (mercaba.org/fichas/laico).

いずれにしても、私たちが在俗性について、教会の本来の特徴の一つとして語るとき、それが教会のメンバーの一部分だけ、つまりもっぱらライチ・信徒に関わることであり、まるで特別な奉獻の召命、また叙階による奉仕職への奉獻の召命を頂いた人々には「在俗の次元」がないかのように語るなら、それは重大な間違いになります。「信徒の尊厳を認識することによって、教会そのものにおける信徒の役目、したがってその必要性が明らかになる。公会議は『現世的な働きに従事し、それらを神に従って秩序づけ』（第二バチカン公会議「教会憲章LG」31）、『世の聖化のために……内部から働きかける』（同上）ことのうちに信徒の使命を見る。『信徒によらなければ教会が地の塩となることができない場所と環境において、教会を存在させ活動的なものとする』（同 LG, 33）に信徒は呼ばれている。この世を前にして、教会が信徒を必要としていることが全面的に認識される。教会は、信徒において、そうでなければたどり着くことができないところへも、赴くことができるのである。」⁵

私たちは誰かが家に来たと聞いたなら、その人を出迎えに行くでしょう。これがキリスト者に求められる姿勢です。キリスト者は**自らの魂の深みに聖霊が絶えず訪れられる**と知っているのです。「**神のために生きる**」ということは、**人類のうちにあるあらゆる豊かさを探し求める精神を持つこと**です。**十全に人間らしいもののみが、神的存在であるのです**。神のために生きるということは、発見する事柄に忠実であることです。そしてこの世界を驚き、「神の驚き」で満たすこと。そして、われわれ人間の行為によってしばしば壊され混乱したこの世の秩序を回復させたいという望みを輝かせながら、働くことです。

4. パン種となるように呼ばれたドン・ボスコの家族

サレジオ会の歴史におけるこのエピソードは、光を与えてくれます：**1855年6月24日**、オラトリオでは二重のお祝いが祝われていました。「華やか」という言葉が控えめな表現になるほどでした……トリノ中が市の守護聖人をたたえて祝っていましたが、それは**ジョヴァンニ・ボスコの霊名の祝い日**でもあったのです。誰もがボスコ神父に愛情を表そうとし、神父は大きな心でそれに応えました。

1855年6月23日の夕、ドン・ボスコは少年たちに言いました：「明日、君たちは私のためにお祝いをしたいと願っています。皆に感謝します。私からは、君たちがいちばん望んでいる贈りものを上げたい。そこで一人ひとり**カード**を取って、それに何を望んでいるか書いてほしい。私は金持ちではないが、君たちが王宮を願ったりしないかぎり、望みに応えるためにできるかぎりのことをしよう。」

ドン・ボスコは少年たちが書きとめたものを読みましたが、その中には真剣な願いもあれば、おかしな要望もありました。ある少年は、「**100キロのトッローネ（ヌガー）**。一年中、食べられるように」、もう一人は、「**家に置いてきた子犬の代わりに**」子犬を願いました。ドメニコ・サヴィオの友人、ジョヴァンニ・ロダは、「**ベルサリエリのようなトランペット**。あの楽隊に入りたいので」と願いました。

一方、ドメニコ・サヴィオのカードには、ただひと言、書かれていました：**「聖人になれるように助けてください。」**

ドン・ボスコはドメニコを呼び、言いました：「君のお母さんがお菓子を作るとき、混ぜ合わせるいろいろな材料を挙げた**レシピ**を使うだろう：砂糖、小麦粉、たまご、イースト……」

聖人になるのにも、**レシピ**が必要なんだ。それを君に上げよう。混ぜ合わせなければならない三つの材料を挙げた**レシピ**だよ。

⁵ Nicolás Núñez, L.C., *La vocación laical en la Iglesia. Una reflexión desde la perspectiva eclesiológica*. Ecclesia, XXIX, n. 3-4, 2015 – p. 218.

- **1つ目：喜び。**暗い気持ちにさせ、平安を奪うものを、主は喜ばれない。捨て去りなさい。
- **2つ目：務め**—勉強と祈り。学校では集中し、勉強に打ち込み、祈りに呼ばれるとき、喜んで祈りなさい。
- **3つ目：人に善を為す。**友だちが助けを必要とするとき助けなさい。たとえいくらかの苦労や努力が必要になったとしても。聖人になるレシピはすべてここにある。」

ドメニコはこのことについて考えてみました。最初の二つの「材料」は、もう持っているように思われました。しかし、人に善を為すことについては、もっと何かできる、考えて工夫できると思いました。その日以来、ドメニコは努力しました。

砂糖や小麦粉、卵、イーストなどが材料として入っているマンマのケーキのレシピのように……ドン・ボスコは少年たち、特にドメニコ・サヴィオに（1855年6月24日の夜）**聖性のレシピ**を示し、それには次のものが入っていました：**喜び、務めを果たすこと、善を行うこと**。神が私たちを植えられたささやかな場でパン種となるための完全な計画です。

頂いたカリスマとして、私たちは、さまざまな社会的背景、生きている身分、職業・専門の経験を持つ人々の共同体、交わりとして誕生しました……同じ使命に結ばれ、ドン・ボスコが伝達することのできた同じカリスマを担い、そのカリスマが原動力となっています。これが、創立期、1841年から1859年にかけての、18年間に及ぶ、オラトリオの特質なのです！ 会憲の最初の草案は、最も危険にさらされた若者を「よいキリスト者、誠実な市民」に育てるために、神の民が、さまざまな形で協力して働く姿を強く反映しています。私たちが、誕生した初めから、神の民の集いであることは否定しえないのです：それは私たちのカリスマと使命の特質なのです。

このことは私の思いに強くあり、私はこの意識を全サレジオ家族に伝えるように努めています。サレジオ家族は今日の世界で、今日の人類家族の中で、まことのパン種となるよう呼ばれています。そうして、私たちが共に、交わりのうちにあるとき、今日、はじめて何か意味のあることができるということが、明白となるのです。私は全サレジオ会に向けて、私たちの使命が信徒・ライチと共有されるものであることについて、強い訴えかけを行いました（ドン・ボスコの家族全体のための訴えかけです）。なぜなら、これに耳を傾けないことは、遠くない将来、引き返すことのできない危険な状況に私たちを至らしめるからです。私が述べたように、「私たちの第24回総会は確かに、第二バチカン公会議の交わりの教会論への私たちのカリスマに基づいた応答でした。ドン・ボスコがヴァルドッコでの活動の初めから、多くの信徒・ライチ、友人や協力者に参加してもらったことを私たちはよく知っています。それによって、その人々も、若者たちの中でのドン・ボスコの使命に参加できました。ドン・ボスコは初めから『自らの仕事に、聖職者、ライチ、男性、女性たちの一団に参加してもらい、責任を共に担ってもらうことができた』⁶のです。そのため、いかに抵抗しようが、私たちは後戻りできないところに立っています。なぜなら、ドン・ボスコの行動に倣うものであることに加え、信徒・ライチと使命の共同責任を担うという第24回総会が提示した活動モデルは、実際、『今日の現実の状況下にあって実践しうる唯一のモデル』⁷であるからです。」（第28回総会による考察のまとめ、6より）

ドン・ボスコの使命の最終的な目標は、子どもたちの救いととも、社会を変容させることです。これを書きながら、2020年のストレンナ —「みこころが天に行われるとおりに、地にも行われますように」誠実な社会人、キリストに倣う者 **Good Christians and Upright Citizens** — も思い起こされます。予防教育法は、一人ひとりが「時の中で、そして永遠において幸せになれるよう」個人を教育することだけを目指すものではありません：未来のため、すべての人の成長のために最も豊かな源泉となりうる「人類社会の最も繊細で、最も貴重な層」（サレジオ会 会憲第1条）が、教会と社会の現在と未来を台無しにする悪の循環に入ってしまうことがないよう、予防することを目指すものです。ドン・ボスコの広い視野をもった勇気あるビジョン、豊かな実を結ぶ疲れを知

⁶ 第24回総会文書 GC24, no. 71.

⁷ GC24, no. 39.

らない働き、障壁を前にしても屈しない力……それは、この社会の変容と世界的規模での若者の福音化という地平によってはじめて説明できるのです。

これは私たちの父ドン・ボスコに尊敬の目を向けるためだけでなく、若者の世界においてこれほど幅広く遠くまで行き渡る私たちの存在の可能性を活かす貴重な要素であると、私は考えます。若者をただ問題として（もしかすると恐れながら）見るのではなく、世界の現在そして未来への答え、応答として、若者への同じ信頼を共有するすべての人と「共に」働く運動となるときに、私たちが持つ可能性です。

ドン・ボスコは政治に関わりませんでしたが、行政のさまざまなレベルを代表する人々と話すことができました。ドン・ボスコの取り組みが若者の善益へと方向づけられていることがあまりに明白であったため、人間社会と他者への奉仕を心にかける人なら誰でも、政治の存在理由であるすべての人の善益のためにある公共組織でさえ、関心を持たずにはいられなかったからです。もし私たちが今日、カリスマとして頂いている若者を心にかける同じ熱意を共に体現できるなら、私たちが一致して上げる声は、信教・信条の境界を超えて人々の心に届き、耳を傾けてもらえるでしょう：そして、世における教会のこの在り方、辺縁に存在する在り方は、現在の教会の教導にとってもよく一致しています（「現代世界憲章」から「ラウダト・シ」に至るまで……そのほか多くの権威ある文書）。それは、私たちが**ドン・ボスコの家族として共にある**ことによって、はじめて実現できる教会としてのあり方なのです。

ドン・ボスコの家族におけるさまざまな召命の相互補完的性。若者の教育に意味のある影響をもたらしたいなら、一人ひとり、皆が献身して取り組み、責任を共有することが大事で欠かせないことが、ますますはっきりしてきています。**サレジオ家族として「共に」あること、そして世界中の福音宣教や養成のさまざまな現場にいる、実に多くの信徒・ライチといつも共にあることは、使命を果たすために、避けることのできない要件となります。**自分たちが意味のない存在になってしまいたくないのなら。

家庭的精神における交わりと幅広いサレジオ運動

実際、私たちが皆、同じ舟に乗り込んでいて、養成を必要とする諸分野があります。例えば、新たな世代とつながるデジタルの世界に関わる分野、あるいは、幅広い、避けて通ることのできない総合的な^{インテグラル}エコロジーの分野などです。私たち皆が、学ぶべきことがあります：それが学びながら共に歩む道であるならば、はるかに効果的なもの、現実に即したものとなりえます。また、学びの過程で生み出されるダイナミズムは、共に行う福音宣教と養成のやりかたを変容させます。この新しいミッションのありかたによって、私たちは、教会、世界、若者が私たちに期待するパン種となるのです…… 私たちはまだそこに到達していません。パンの生地は変わりました…… 私たちは今再び、自分たちが呼ばれているものに立ち帰らなければなりません、そしてそれは、共に歩むとき、はじめて可能になるのです。結局それは、初めにあったものと同じダイナミズムです。ドン・ボスコは技能や知識をすべて持っていたわけではありませんでした：皆で共に養成されたのです。マンマ・マルゲリータのような信徒・ライチや、当時のほかの多くの協働者がいなければ、また、最も良く知られている名を挙げればドメニコ・サヴィオら、少年たちがいなければ、ドン・ボスコも、その後続く私たちも、今とは違ったものになっていたでしょう。

5. 美しい実を結ぶ大きな木の木陰で

私はサレジオ家族の列福列聖運動のための第2回セミナーの終わりに、手紙で次のように述べました：「ドン・ボスコから現代に至るまで、注目すべき聖性の伝統があることを私たちは認めます。なぜならそれは、ドン・ボスコに発するカリスマの受肉であり、多様な身分のうちに、さまざまな形で表現されてきたからです：男性、女性、若者、大人、奉獻生活者、信徒・ライチ、

司教、宣教師らが、さまざまな歴史的、文化的、社会的状況において、時空のなかで、サレジオのカリスマ固有の光を輝かせてきたのです。それは、信じる人々の生活と共同体のうちに、また善意の人々の間で、効果的な役割を果たす遺産となっています。」⁸

謙遜に、そして深い感謝の念とともに、私たちはサレジオ修道会とサレジオ家族のうちに、豊かに聖性の実を結んだ大いなる木を認めます。その聖人たちは、若者、信徒・ライチ、殉教者、愛のパン種で生き方を満たした人々です。その愛は、イエス・キリストとキリストの福音に忠実に、あますところなく自らを与える愛です。

- 聖性の美しい実を結んだ大きな木、その実とは（中でも）次の人々です：セフェリーノ・ナムンクラとラウラ・ビクーニャ、アルベルト・マルヴェッリ、ドメニコ・サヴィオ、アレッサンドリーナ・ダ・コスタ、アッティリオ・ジョルダーニ、ポズナニの若い殉教者たち、パキスタンの若者バシールやブラジルの先住民族出身のシマオン・ボイ・ボロロ、サレジオ事業の支援者ドロテア・チョピテア。
- もちろん、マンマ・マルゲリータの美しい姿があります。傍らにいる身近な聖性、愛する息子ジョヴァンニの心を形づくり、それまでの生活を後にし、ささげるといふ飾らない自己贈与によって、そうとは知らずにカリスマの誕生において共に歩んだ母の聖性。
- 列聖の年に、アルテミデ・ザッティを忘れることはできません。もちろんザッティは奉獻された修道者ですが、その聖性の在俗の次元を私たちは忘れません。それはすなわち、小さな村の小さな病院というささやかな場での愛徳の実践です。ザッティ修士は、日常の務めの中で、神を、源泉、信仰の原動力、生きることの目標としながら人々に奉獻する生き方の、例であり、模範です。
- この人々皆、一人ひとりの生き方、模範は、「練り粉の中のパン種」のようです。

6. 現代社会のパン種である若者たち

- 社会あるいは人のために益となる人間のあらゆる行為は、この世における神の働きと結ばれており、福音化 mission への、愛に動かされた協力となります。特に、サレジオの現場においては、若者の善益と全人的成長に関わるあらゆる事柄は、福音の種を宿しています。イエスの名によって差し出される、一杯の爽やかな水^{さわ}でさえも。そのため、サレジオ運動の若者の霊性の重要性を強調し促進することが必要になります。この霊性は、ドン・ボスコの精神のうちに行われるあらゆる事柄の、使徒職と信仰の体験に豊かに結ばれ、また、忠実さと連帯を生み出し、今日、世界中でサレジオ・ミッションの主体であり、受益者でもある若者との交わり、共同体の建設を生み出します。
- そして、今日の世界でパン種であるために、2020年のストレンナに調和しながら、教会の社会教説の豊かな伝統に養われ、**政治への参加とそのため求められる養成**に、再び、真剣に取り組むこととなります。パウロ六世が思い起こさせているように、「政治は愛徳の最も高邁な形」です。残念ながら世界の多くのところで、全くの教育的空白が広がっています……。信徒・ライチをパン種と言うとき、この要素を疎かにはできないのです。見事な手本が、私たち家族（アルベルト・マルヴェッリ）、あるいは私たちに近い人々（ジョルジョ・ラピラ、ジュリウス・ニエレレ）の中にあります。

⁸ 総長、第2回サレジオ家族の列福列聖セミナーを締めくくる手紙、ローマ、2018年4月。

次のことを伝えながら締めくりたいと思います。私たちはサレジオ家族として、世界中で、若者たちの傍らで歩み続けたいと願っています。パン種は、生きておられるキリストの福音であることを忘れることなく。生きておられるキリスト、「このかたはわたしたちの希望、この世界で最高峰の若さです。触れる者ものすべてが若返り、新たにされ、生命力にあふれ出します。ですから青年キリスト者にわたしが何より伝えたいのは、このことばです—このかたは生きておられ、あなたに生きる者であってほしくてたまらないのです！」⁹

教皇フランシスコは常に、若者の状況に非常に敏感に、注意深く目を向け、より人間らしい兄弟愛のある社会を築き上げるための人類家族の協力というビジョンに開かれた視野をもって、「開かれた世界を想像し、創造する」ようにと私たちを招いています。そして、真理と人生における幸せを見いだす唯一の道は、隣人を愛し、開かれた心で惜しみなく他者に仕えることなのだ、強く訴えかけています。なぜなら、「愛は、各人の心の奥底から出てきずなを生み、人を自分自身から他者へ向けて抜け出させるときに、存在を広げる」¹⁰ からです。

大きな希望と信頼のうちに、私は全ドン・ボスコ家族を、特にこの家族の信徒・ライチの皆さんを、この広大なサレジオ運動に参加するほかの多くの皆さんを招きます。創意工夫をもって、共に働き、具体的な取り組みをもって、あらゆる方法で、真に私たちの主イエスが宣べ伝えられた福音のパン種のようになる、というストレンナ 2023 のつつましい提案に応えましょう。

総長

アンヘル・フェルナンデス・アルティメ神父, S.D.B.

⁹ 『キリストは生きている』 ChV, 1.

¹⁰ 『兄弟の皆さん』 FT, 88.